

こどもを尊重した関わりを求めて

～抱っこ採血を実施して待つことで見えた子どもの力～

はじめに

国連が1989年に「児童権利条約」を採択し、その後日本も権利条約を批准した。看護においては1999年に日本看護協会より小児看護領域の業務基準が提示され、「こどももひとりの人間として尊重し看護にあたる」ことが明確になった。(スライド2)

しかし、多忙な診療業務の中で、病気や処置の説明が保護者中心になることが多く、また採血・点滴時には母子分離が通常化していた。その理由として、医療の無謬性や処置の能率化があげられる。当院ではこどもを保護者から預かりネットで固定し採血・点滴を行っていた。しかしこの方法は安全性を重視しているが、保護者からの分離により分離不安や恐怖心を招き、号泣する乳幼児が多くいた。力いっぱい抵抗する児を抑えて行う採血・点滴に日常から疑問を感じてはいたが、こどもを尊重したかかわりを現場で実際に行うにはどうすればよいのかという戸惑いもあった。

そんな時に、抱っこ採血が行われていることを知り、当院でも点滴・採血時に母子分離しない抱っこ採血で、少しでも苦痛を緩和し安心感を与えられるように児の発達段階にあったプレパレーション・ディストラクションも合わせて取り組むことにした。(スライド3)

しかし、スタッフの中には保護者の前でを行う採血への不安や、多忙時には午前診で100人を超える受診者がいる中で、採血に時間を要し、他の患者さんへのかかわりが置き去りになるのではないかとの懸念の声もあった。

そこで、従来の採血法と抱っこ採血を以下の項目で比較検討した。項目の内容はこども・保護者の反応、採血所要時間、採血の成功率および溶血率である。

また、実施した結果、0歳児の点滴・採血時において、保護者がネット採血を選択する方が多かったこと、疑問を感じたこと、採血さえも難しい0歳児も抱っこ採血で行ってみてどのような結果が得られたかについても報告する。

検査の目的 (スライド4)

抱っこ採血法とネット採血法との比較を行い、抱っこ採血の有用性および利点を研究調査した。

対象と方法

2014年3月から7月末までに当クリニックで採血や点滴を行った672例

のうち、230例に抱っこ採血を実施した。

- ① こども・保護者に採血方法を選択してもらう：採血実施前に、以前までのネットを使用しての方法か抱っこ採血で行うかをそれぞれの方法についてのメリット・デメリットを説明する
- ② 採血の必要性について説明する：子どもには、どうして採血を行うのかについて、発達段階に合わせ言語と視覚的教材を用いて説明する。
- ③ アンケート調査を行う：抱っこ採血を選択した場合には、採血後に任意で保護者に行う
- ④ ノートに記録する：処置中の児の様子、採血所要時間、および患児の溶血の有無

※採血の方法は保護者と向き合った形の抱っこでも、前を向いた形の抱っこでも良い。ナース2人と保育士で行う。発達段階に合わせたディストラクションの実施。1歳未満であれば、音の出るおもちゃや音楽、お唄や人形劇をしながら、幼児は紙芝居や指人形、絵本、DVDをみながら実施する。

※倫理的配慮：抱っこ採血実施後の記述式アンケートは無記名で保護者の同意のもとに行い、個人が特定されないように十分配慮した。

(スライド5～7)

実際の採血の様子を紹介

結果

(スライド8) 抱っこ採血を行った年齢別件数は0歳27件、1歳49件、2歳44件、3歳45件、4歳28件、5歳20件、6歳以上17件と1～3歳にピークがあった。

(スライド9) 採血結果より溶血率は、ネット採血で176件中14件(7%)、抱っこ採血で161件中5件(3%)であった。

(スライド10) 保護者へのアンケート調査では、

採血時に同室することの質問は「良い」が94%「どちらでもない」が5%「悪い」が1%であった。

選択した方法については、「良い」が98%、「どちらでもない」が2%「悪い」が0%、

(スライド11) 今後も同じ方法でやってみたいか、については「やってみたい」が83%、

「どちらでもない」が15%、「やりたくない」0%で、無回答2%であった。

(スライド12)

感想欄には、一緒にいることで子どもが安心できた、外で泣き声だけを聞いて

いるより、子どもの頑張る姿がみられて親も子どもも不安が軽減できたという肯定的な意見が大半を占めた。一方、採血場面を見るのはやっぱり辛い、ネット採血もしたことがないので抱っこ採血と比較できなかったという意見も少数ながらあった。

看護師の感想や心境の変化として、子どもに一生懸命声掛けする保護者が看護師の手技にそれほど、集中してみているわけではないと感じ、実施者の不安が軽減した。予想に反してスムーズに行えたことで、保護者の前での採血に苦痛を感じなくなったなどがあった。

また、採血所要時間は、(スライド13)抱っこ採血(230人)で5分以内が116人、(50%)6分以上10分以内100人(44%)、11分以上14人(6%)、であった。それに対して、ネット採血(35人)は5分以内11人、6分以上10分以内16人、11分以上8人であった。

(スライド14)

抱っこ採血を実施し、1か月半が過ぎるころに0歳児は保護者の「小さいから何もわからないだろう」という理由からネット採血を希望する方が多いことに疑問を感じた。そこで、5月より保護者に0歳児でも抱っこ採血が可能であることを説明し了承を得られた方に実施した。その結果、5月には件数は4倍に増加し、7月には全例が抱っこ採血であった。

0歳児の感情の評価は困難なため、抱っこ採血を行った児の緊張状態により起こる溶血と、成功率を調べるために穿刺回数を比較した。

(スライド15)

その結果、穿刺回数はネット採血で1回が13人、2回が5人、3回以上が1人、抱っこ採血で1回が24人、2回が3人、3回以上が0人だった。

(スライド16)溶血率は、ネット採血で11%、抱っこ採血で7%であった。

考察(スライド17)

採血方法をこども・保護者に選択してもらうことで親子を尊重した関わりができた。看護師でなく、自己決定したことや、採血の場면을共有できたことで、抱っこ採血を選択して「良かった」という人が98%という好結果が得られたのではないかと考えられる。

また採血時、子どもの心の準備ができるまで十分待つことを重視した。そのことが子どもの乗り越える力を引き出し、子どもとの信頼関係の構築を導いた。また、保護者・看護師も子どもの乗り越える力を実感し感銘を受けた。

抱っこ採血で、1～3歳の処置件数がピークであった。それは、幼児期前期では、それまでの母子一体感の世界から自分は母親と別の独立な存在であることに気づく「自律」の時期にある。採血時プレパレーションを通して発達課題

でもある「自律性」を獲得し、実施前に視覚的教材も使用して説明することでイメージが描ける年齢でもあるので、この結果につながったのではないかと考える。

4歳以降で、抱っこ採血件数が減少した理由として座位で一人で採血できる子が増えたためと考えられた。

抱っこ採血実施前は、スタッフの中に時間を要するのではないかとという懸念の声があった。しかしながら結果はネット採血より抱っこ採血の方が時間を短縮できた。その要因として、発達段階に合わせた、プレパレーションを行う意義が大きいことがわかった。子どもの心の準備ができスムーズに行え、その結果時間を要さないと考えられる。中には、怖くて採血に時間を要した事例も何件かある。しかし、それが悪いわけではなく、今回頑張れたことに焦点を当て、次につなげるようなかわりが重要であると考えられる。

エリクソンの乳児期の発達課題は、保護者からの愛情を受け信頼感を獲得する時期である。この時期だからこそ、抱っこ採血で行う必要性を感じた。その結果より、採血の必要性はまだ理解できなくても、保護者にぎゅっと抱きしめられることで、安心し緊張状態の軽減につながっている。また、穿刺回数を比較しても、抱っこ採血の方が少ない傾向にあり、0歳児の抱っこ採血は、小さいから何もわからないという考えは否定できる。また、看護者も0歳児の抱っこ採血は困難という固定概念にとらわれてはいけなと感じた。この結果より、0歳児にも抱っこ採血は有効と考えられる。

おわりに

一人ひとりのかわりを大切にすることで、クリニックスタッフの、子どもや保護者に対する行動変化がみられた。これは、子どもの乗り越える力を身近に感じ、子どもの気持ちを待つことや、子どもの力を信じることの大切さを子ども・保護者から教えられた結果であると考えられる。

そのかわりは、子どもの成長を促していくために必要不可欠であると感じた。以上のことから、子どもを尊重したかわり（抱っこ採血）は、子ども、保護者、看護者にとっても利点が多く、有用性が高いと考えられる。

今後、抱っこ採血を同じ子どもに2回目、3回目と行うことで、子どもにどのような変化がみられるか、また、0歳児の抱っこ採血の評価方法（泣き止むまでの時間など）を引き続き検討していきたい。